**MINISTOCK　１**

1891年にアイオワ州立大学を卒業し弁護士試験に合格したポール・ハリスは、直ちに弁護士業務に就くことなく、５年間にわたる放浪の旅に出ました。その間彼は、新聞記者，缶詰工場、農場、ホテル、そして大理石会社の外勤営業員として全米各地を回り、船員として英国、中米各地、ヨーロッパ諸国を訪れる機会を得て、多くの人々と接し、人々から親切を受ける機会が与えられました。これらの経験が後日のロータリー・クラブ設立の背景をなしたといわれています。

　当時の社会が「騙されたヤツがバカだ！」と言われるような厳しい商業社会であったという予備知識がなければ、ポール・ハリスの社会経験が単なる放浪の旅としか映らないでしょうが、多くの人々との交流と、それらの人々から受けた温かい心遣いが、これまでになかった社交クラブを設立するという考えを創造していったと考えられます。

彼がシカゴに移ったのはまさに世紀末で､20世紀に向けて新しい時代が始まろうとしていました。

**MINISTOCK　２**

弁護士ポール・ハリスは、大都会の多くの異業種の中から１名だけの最良の会員を選び、そのメンバーだけが集う社交クラブを設立するという考えをもって、1905年2月23日、石炭商のシルヴェスター・シール、洋服業のハイラム・ショリーに語りかけ、さらに鉱山技師のガスタヴァス・ローアの事務所で、その構想を語りました。

この一業種一会員制の基本はポール・ハリスのオリジナルな考えですが、街中で普通には面識のない多くの人々と知り合いになるという大きなメリットがあり、長年にわたってロータリーの基本にされてきました。

しかし実のところは、複数の同業者が集まって、その中で利害関係が生じると、クラブ内で騒動が発生するため、それを避けるための手段であったということです。これがロータリーの最初の目的であった“相互扶助”とぴったりマッチして、ロータリーが発展する基礎となりました。

**MINISTOCK　３**

　４人が集まった２週間後にポール・ハリスの事務所で開かれた第２回の会合には、不動産業のウイリアム・ジェンソンと、印刷業のハリー・ラグルスが加わりました。

　そして第３回会合が開かれた３月23日までに、洗濯業のアーサー・アーウイン、オルガン製造業のアル・ホワイト、保険業のチャールス・ニュートンが入会しました。この第３回会合がシールの職場であったのを記念して、初代会長にはシルヴェスター・シールが選ばれました。

　このときクラブ名が討議され、Booster Club, Round Table Club, Chicago Circleなど12もの名称が提案されたようですが、９人の意見がまとまらず、最終的に初代会長のシールの発案によって“Rotary Club”と命名されたと言われています。

　ロータリー（回転）とは、クラブの例会が会員の事務所の持ち回りであったことに由来するとの説がありますが、一方では、ロータリーの紋章が馬車の車輪に由来することと関係があるかも知れません。

**MINISTOCK　４**

ポール・ハリスと最初期の３人のメンバーが集まって鉱山技師ローアの事務所でクラブの構想を語り合ったのが1905年2月23日でした。従って、この日にはまだ、クラブの名称も、会合の間隔や持ち方も、そして会合の目的も文章化されていませんでしたので、普通に見れば、この日とそれ以後の数回の会合は、クラブ創立準備会と言えるでしょう。

　しかし歴史家は、一つ一つの事態をたいそうに意義付ける傾向にあり、ロータリーは後日、この日を「創立記念日」に指定しました。

　従って当初のロータリーの年度は、２月に始まって１月に終わるものでした。

　現在のロータリー年度が７月に始まって６月に終わる形になっているのは、世界中のクラブの連合体でしかなかった「国際ロータリー・クラブ連合会」が、独立した組織である「国際ロータリー（ＲＩ）」に移行したのが、1922年７月だったからです。

**MINISTOCK　５**

第３回目までの会合が２週間おきに開かれていましたので、これが初期ロータリー・クラブの慣例となって、第４回はショリーの洋服店、第５回は不動産業ジェンソンの事務所で開かれました。第６回の開催は印刷業ラグルスの事務所でしたが、このとき保険業のニュートンが空腹のために途中で食事をしていて遅刻してしまいました。

　それならば皆で食事をすればよいということになって、ホワイトのオルガン製造工場で開く予定だった第７回会合を、食事のできるPalmer Houseに移しました。これが成功だったので、第８回会合以後はシカゴ市内のホテル、ヨットクラブ、レストランなどを巡って集会場にしました。

　16~18世紀にかけてイギリスで発達してきた「クラブ」の集会が、当時ロンドンで広まったコーヒーハウスや、ターバンと呼ばれた宿屋で開かれていたことを考えると、ロータリーの例会がホテルやレストランに移ったのは自然なことだと思われます。

**MINISTOCK　6**

第３回会合で初代会長に選ばれたシルベスター・シールは、そのとき自身の職業である石炭業界の話をしたと記録に残されていて、これがロータリーの卓話の始まりと伝えられています。

第７回例会以降、例会が食事付きになると、ロータリーが欧米の慣習であるafter-dinner speech＝卓話 を取り入れたのも、ごく自然な成り行きだったと考えられます。従って卓話は、ロータリー関連の話に限らず、職業や業界の話、時事問題など、会員が広い知識を得るための手段になっています。

昼食時に開催される多くの例会では、例会場に到着した人からそれぞれに昼食を始めるというクラブが多いようです。夕刻の例会であった私たちのクラブでも、同じスタイルでしたが、例会開始直前に到着した人は、会長の時間や卓話の最中に食事をすることになります。

そこで、清水宏彦第３代会長が、会員に対面して前方にあった役員席を廃止するとともに、食事時間帯を変更されて現在の形になりました。

**MINISTOCK　7**

　会員間の絆・親睦を重視してきたロータリーは例会への出席を義務化してきました。それが４回連続して例会を欠席した場合には会員資格を失うという申し合わせになり、長く継承されてきましたが、実は、この申し合わせは、一業種一会員制とともに、第一回会合で決められたことなのです。

　現在では国内・海外への出張・旅行などでも、その土地のロータリー・クラブへのメークアップが可能ですが、当時はシカゴ以外にロータリー・クラブがありませんから、この規制は厳しいものでした。

　しかしながら､1998~99年度RI会長のジェームス・L・レイシー氏のように、若くしてロータリアンになり、一度退会して、再び推薦されて再入会した後、ロータリー内でさまざまな活躍をされてRI会長にまで登ったという人もいます。

　従って、会員資格を失った人が再入会することを容易にするために、再入会時には入会金を徴収しないという規定が定められています。

**MINISTOCK　8**

　ニコニコ箱は、日本各地のクラブで、ニコニコ・ボックス、スマイル・ボックスなどと呼ばれて、これが設置されていないクラブがありません。

　海外のクラブでも設置しているのが通例ですが、日本のクラブでは1936年（昭和11年）に大阪クラブでニコニコBOXとして始まって以来、続けられている慣習です。

　本来は、個人的に嬉しかったこと、喜ばしいこと、誕生日、何かの記念日など、また会社の創立記念日や事業拡張記念など、何かにつけてBOXに善意のお金を納めたものをいいます。通例では拠金に強制はありませんが、地域社会に役立つ社会奉仕活動などに使用されます。当クラブでは、ニコニコ箱が半強制的で、クラブ運営資金の一部となっていますが、これは本来の趣旨ではありませんから、形式だけでも改めてほしい気がします。

　ところでこの制度が始められたのは､1905年の第３回例会であって、それを「ファインボックス」といったそうです。

**MINISTOCK　9**

この頃、ロータリーの紋章（バッジ）制定の話が持ち上がったようです。最初の紋章は印刷業のラグルスが、新聞広告の馬車の絵と、会場持ち回りのロータリーとを結びつけて、馬車の車輪をデザインしたとされています。ところがこの馬車が荷馬車であったために不評を買い、彫金師のモンタギュー・ベアが14本の支柱を有する二頭立て馬車の車輪に改良しました。その後、幻灯機製造のＬ．Ｔ．フィリップによって支柱が12本に改められ、リボンとRotaryの文字が入れられました。

1910年に全米ロータリー・クラブ連合会が結成されるまでに設立された16のクラブは、それぞれ独自の紋章を付けていたようです。連合会は共通の紋章として、シカゴクラブの車輪をアレンジして８本の支柱と19個のギアをもつ歯車をデザインしました｡1920年には支柱が６本でギアが24個に変更され､1923年に歯車の中心に楔穴が付け加えられて現在の形になりました。

**MINISTOCK　10**

　ロータリー・クラブの設立趣旨を表す条文が制定されたのは1906年1月になってからのことでした。

起草はポール・ハリス、保険業のチャールス・ニュートンと、後に入会した法律家のマックス・ウォルフで、条文は次の２項目でした。

１．クラブ・メンバーの事業利益を増大すること。

２．社交クラブに付随する親睦その他の必要事項を推進すること。

第２はロータリーが“クラブ”と称することによって自動的に付与される性格ですから、ロータリー固有の「目的」と「特質」は第１に示された“会員間の商取引を推進して事業利益を増大すること（相互扶助）”にあります。

　当時の商取引は、売り手も買い手も互いに相手を信用できるか否かに成功の鍵がかかっていて、「騙されたヤツが悪い」という社会だったので、ロータリアンとしての信用を背景に相互扶助の精神で取引を推奨するロータリーという会が、斬新で魅力的な集団として人々の関心を集めました。